

子どもたちへのがん告知

看護学科准教授 三宅玉恵

大人たちへのがん告知はよく話題になり、告知することが一般的になってきましたが、子どもたちについてはどうでしょうか？子どもたちにがん告知するなんてと思われるのでしょうか？2005年に行われた小児がん専門医（362名）への調査¹⁾では、子どもにはっきりとがんだと「いつも」伝えている医師は1割弱でした。

診断技術や治療のめざましい進歩にともない、がんの子どもたちの長期生存率（治療後5年以上生存している率）は著しく向上してきました。しかし、一方で抗がん剤治療や骨髄移植といった治療の厳しさも増してきて、子どもたちの体験する苦痛ははかり知れません。私が直接お話を聴かせていただいた中学生のお子さんは、「自分ががんだって知らなかったら、こんなしんどい治療続けてられなかったかな」と話してくれました。

1990年代のアメリカの研究²⁾では、早くから診断や予後について情報を与えられていたり、病気について理解している子どもたちが精神的に健康であることが明らかにされています。2004年に日本で行われた面接調査³⁾でも、病名を告知されることで闘病意欲が高められ、気持ちが揺らいだときに周囲から精神的サポートを得やすいことを、子どもたちが語っています。

ただ、断っておきますが、ここで問題としたいのは病名を告げるか告げないかだけではありません。医療者が重要と考える病気や治療に関する情報と、子どもたちが求める情報とはギャップが生じている可能性があります⁴⁾。子どもたちは病名や病気の説明よりも、病気になって治療を受けることにより、実際、どのようなことが起こるのかを知りたがっていました。子どもたちが何を知りたがっているかに合わせた説明が必要でしょう。また、一度、話をしたからといって終わりではありません。2004年の研究にもあったように、治療をしている間、子どもたちの気持ちは当然揺らぐのです。病名を告知するのは主に医師であったとしても、子どもたちに24時間接している看護師は日々のかかわりの中で、子どもたちのからだや心の状態を見極めながら、苦痛を伴う治療などに対応していくことができるよう支援しようと努めています。子どもたちがどんな思いなのかを見守りながら、そのときどきの子どもたちの気持ちにより添ってサポートしていくことが重要だと考えます。

引用文献

- 1) 戈木クレイグヒル滋子他(2005) .小児がん専門医の子どもへの truth-telling に関する意識と実態:病名告知の状況 . 小児がん , 42(1) , 29-35 .
- 2) Last, B.F. and et. al. (1996).Information about diagnosis and prognosis related to anxiety and depression in children with cancer aged 8-16 years. European Journal of Cancer . 32(2), 290-294.
- 3) 戈木クレイグヒル滋子他(2004) . 闘病という名の長距離走 病名告知を受けた小児がんの子どもへの闘病体験 . 看護研究 , 37(3), 267-283.
- 4) Bradlyn, A.S. and et. al.(2004). Pediatric oncology professionals' perception of information needs of adolescent patients with cancer. Journal of Pediatric Oncology Nursing, 21(6), 335-342.